

大妻学校機関誌『大妻時報』の整理と調査

Organizing and researching Otsuma Jiho, the journal of Otsuma School

高塚 明恵¹, 青木 俊郎¹, 下田 敦子²
Akie Takatsuka¹, Toshiro Aoki¹, and Atsuko Shimoda²

¹大妻女子大学博物館, ²人間生活文化研究所

キーワード：大学機関誌, 大妻コタカ, 大妻教育, 大妻女子大学博物館

Key words : University journal, Kotaka otsuma, Otsuma's education, Otsuma Women's University Museum,

1. 研究目的

本研究では、大妻女子大学博物館の所蔵資料である、大妻学校の機関誌『大妻時報』について、資料の現状を記録して整理し、その内容を調査し詳細を明らかにする。

大妻学校の機関誌は、大正10年(1921)発行の『白ゆり』(しらゆり)に始まる。『白ゆり』は大妻学校の在校生と卒業生が組織する同窓会の会誌であり、大妻学校の行事や交友活動、卒業生の消息などが掲載されていた。『白ゆり』の発行は大正15年(1926)でいったん途絶え、昭和2年(1927)1月1日に『ふるさと』が、続いて4月に『大妻時報』が発行された。『大妻時報』は昭和2年(1927)4月から、昭和4年(1929)3月まで、地久節(皇后誕生日、昭和天皇の皇后であった香淳皇后の誕生日は3月6日)にちなみ毎月6日に発行された。

現在、大妻女子大学博物館には、大妻学校が発行してきた機関誌が所蔵されている。これらの資料を整理し、デジタルデータを作成して、書誌情報や掲載内容の全貌を明らかにすることは、博物館資料としての価値をさらに高め、また大妻教育や日本の女子教育に関する研究を深化させるための一助になると考えている。

なお、『大妻学院八十年史』(大妻学院八十年史編纂刊行委員会, 1989)には、昭和4年(1929)に財団法人大妻学院が認可されるまで、大妻技芸学校と大妻実科高等女学校を「大妻学校」と総称していたことが記されており、本研究でもその定義に準じて表記している。

2. 研究実施内容

本研究ではまず、『大妻時報』について、各号の収蔵状況を確認し、点数・頁数・法量・状態(変色、

シミ、オレ、ヌレ等)等を記録した。その結果、大妻女子大学博物館では『大妻時報』を49点所蔵しており、資料状態は、多少の水ヌレ跡や、ヤケなど経年の劣化は認められるが、おおむね良好であることが確認できた。

次に、各号について全頁をデジタルスキャナーで取り込み、現状記録保存用に高画質のTIFFファイルを作成した。



図1. 『大妻時報』1巻1号表紙

また該当資料は、発行から95年が経過しており、これ以上の原資料の劣化、破損等を防ぐため、これ以降の調査作業のために作業用としてPDFファイルとJPEGファイルも同時に作成した。さらにそのデータを用いて、各号の書誌情報、及び各号に掲載されている記事の見出し・著者・該当頁・記事の概要を調査・記録した。

巻	号	発行年月日	頁数	所蔵点数
1	1	昭和2年4月6日	8	1
1	2	昭和2年5月6日	8	1
1	3	昭和2年6月6日	8	1
1	4	昭和2年7月16日	8	2
1	5	昭和2年9月16日	8	2
1	6	昭和2年10月10日	8	2
1	7	昭和2年11月6日	8	2
1	8	昭和2年12月6日	8	2
2	1	昭和3年1月6日	12	2
2	2	昭和3年2月6日	12	2
2	3	昭和3年3月6日	16	2
2	4	昭和3年4月6日	16	1
2	5	昭和3年5月6日	16	2
2	6	昭和3年6月6日	16	3
2	7	昭和3年7月6日	16	2
2	8	昭和3年9月6日	16	2
2	9	昭和3年10月6日	16	2
2	10	昭和3年11月6日	16	2
2	11	昭和3年12月6日	16	2
3	1	昭和4年1月6日	16	2
3	2	昭和4年2月6日	16	2
3	3	昭和4年3月6日	16	2
3	4	昭和4年4月6日	16	1
3	5	昭和4年5月6日	16	2
3	6	昭和4年6月6日	20	1
3	7	昭和4年7月6日	20	2
3	9	昭和4年9月6日	16	1

表1. 『大妻時報』書誌及び所蔵データ

『大妻時報』は昭和2年(1927)4月6日(図1)から、8月を除いた各月の6日に発刊され、最終巻の3巻9号(昭和3年〔1948〕9月6日)までに27巻が刊行された。サイズはいずれも、縦190mm程度×横260mm程度で、B判の八切の紙を重ね中心で2つ折りにした、十六切の冊子状であった。

創刊号から1巻8号(昭和2年〔1927〕12月6日)までは2枚重ねて2つ折りにした8頁であったが、昭和3年〔1928〕1月6日発行の2巻1号では3枚を重ねた12頁に、2ヶ月後の2巻3号では4枚を重ねた16頁へと増加していき、昭和4年6月6日に発行された3巻7号には5枚重ねの20頁になった(表1)。このようなページの増加傾向から、『大妻時報』がわずか2年弱の間に多くの読者を獲得していったと推測できる。最終巻の3巻9号(昭和4年〔1929〕9月6日)では再び16頁に戻るが、翌月の10月には『大妻時報』を発展させた『現代の婦人』が創刊されており、その準備のための一時的な縮小であったと思われる。

当初は大妻コタカ・良馬夫妻による家事論や教育論などの記事と、他の雑誌や新聞からの抜粋、読者からの質疑応答欄が紙幅の大半を占めていたが、ページが増加するにつれてしだいに当時在職していた教職員たちが執筆陣に名を連ねるようになり、染色・料理・摘み細工・マクラメ編み・西洋刺繍・生花・小説など、多彩な内容が掲載されるようになった。

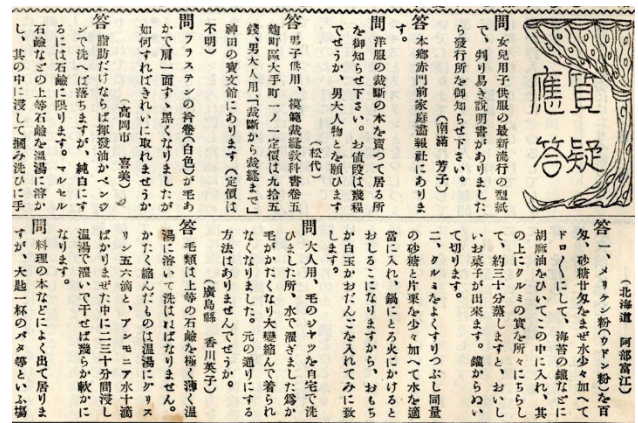


図2. 質疑応答欄 (2巻3号)

また、読者は大妻学校の卒業生・在校生が想定されていたようだが、質疑応答欄(図2)には一般の主婦や女学生たちからも質問や感想が寄せられており、大妻教育が当時の女性たちに広く受け入れられていたことがうかがえた。質疑応答欄には、

洗濯・裁縫・育児などについて細々と問い合わせたものから、親戚との付き合い方、進路の相談、結婚についてなど、幅広く投稿され、当時女性たち日々が抱えていた大小様々な問題が浮き彫りにされている。

3. まとめと今後の課題

本研究で『大妻時報』全27巻49点を整理し、記事の見出し・著者・該当頁・記事の概要等について把握することができた。『大妻時報』には、大妻コタカ、良馬をはじめ、衣笠恵陵、石塚武、藏越緑、南雲ハツヨ、加藤清、柳葉清子など当時の教職員たちが様々な記事を執筆しており、大妻学院の教育史を探る上で基礎的かつ重要な資料である。

今後、大妻学院の学校史や、大妻学校の教育理念を明らかにするためには執筆者や内容、及び同時期の女子教育機関の動向などについて、さらなる精査が必要である。また、『大妻時報』は、昭和4年(1929)10月より『現代の婦人』と改題して、

紙面を大幅に増量し刊行されていることから、引き続き『現代の婦人』についても整理・調査が必要となる。以上2点を今後の課題としたい。

本研究で作成した画像、得られた資料の概要、書誌情報及び、記事見出し等の情報は、大妻女子大学博物館の収蔵資料データベースで公開予定である。

4. この助成による発表論文等

web 公開

大妻女子大学博物館収蔵品データベース

(https://jmapps.ne.jp/museum_otsuma/)において、調査資料の概要・画像を公開予定。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2209)「大妻学校機関誌『大妻時報』の整理と調査」を受けたものです。